



kaminorippo.org

神の律法：付録2：割礼とキリスト教徒

割礼：ほぼすべての教会が廃止されたと考える戒め

神のすべての聖なる戒めの中で、割礼はほぼすべての教会が誤って廃止されたと考える唯一のもののように見えます。この一致は非常に広範で、カトリック教会やプロテスタントの宗派（神の集会、セブンスデー・アドベンチスト、バプテスト、長老派、メソジストなど）といったかつての教義的ライバルや、モルモン教やエホバの証人などのしばしば宗派と呼ばれるグループさえも、この戒めが十字架で取り消されたと主張しています。

イエスはその廃止を教えなかった

この信念がキリスト教徒の間で非常に普及している理由は2つあります。イエスがそのような教義を決して教えなかったこと、そしてイエスのすべての使徒と弟子たちがこの戒めに従った—パウロも含めて、彼の著作は指導者によって異邦人を神自身が定めたこの要件から「解放」するためにしばしば使われます—にもかかわらずです。

旧約聖書には、メシアの到来によって神の民—ユダヤ人であれ異邦人であれ—がこの戒めに従うことから免除されるという予言はありません。実際、割礼はアブラハムの時代から常に要求されてきました。アブラハムの子孫であるかどうかに関係なく、救われるために神が区別した民の一部となるためには、どの男性にも必要でした。

永遠の契約のしるしとしての割礼

割礼に服従しない限り、誰も聖なる共同体（他の国々から区別されたもの）の一部として認められませんでした。割礼は神とその特権を持つ民との契約の物理的なしるしでした。

さらに、この契約は特定の時期やアブラハム

の生物学的子孫に限定されていませんでした。公式に共同体に統合され、神の前で平等と見なされたいと願うすべての外国人も含まれていました。主は明確に述べています：「これはあなたの家で生まれた者だけでなく、あなたが購入した外国生まれの僕にも当てはまります。彼らがあなたの家で生まれたか、あなたのお金で買われたかにかかわらず、彼らは割礼を受けなければなりません。あなたの肉における私の契約は永遠の契約となるでしょう」（創世記17:12-13）。

異邦人と割礼の要件

もし異邦人が主によって区別された民の一部となるためにこの物理的しるしを本当に必要としなかったならば、メシアの到来前に神が割礼を要求し、その後には要求しない理由はありません。

変更を裏付ける預言的支援なし

これが真実であるためには、預言にそのような情報が含まれていなければならず、イエスが彼の昇天後にこの変更が起こると我々に知らせていなければなりません。しかし、旧約聖書には、異邦人が神の民に含まれることについて、アブラハムの生物学的子孫ではないという理由だけで割礼を含むどの戒めからも免除されると示唆する言及はありません。

この神の戒めに従わないために一般的に使われる2つの理由

最初の理由：

教会は割礼の戒めが取り消されたと誤って教える

教会が神の割礼に関する律法が取り消されたと教える最初の理由—誰が取り消したのかを特定せずに—は、この戒めを履行することの難しさにあります。教会の指導者たちは、神がそれを廃止する指示を決して与えなかったという真実を受け入れ教えれば、多くのメンバーを失うことを恐れています。

広く言えば、この戒めは確かに履行するのが不便です。常にそうであり、今もそうです。医療の進歩があっても、この戒めに従うことを決めたキリスト教徒は、専門家を見つけ、自費で支払い(ほとんどの健康保険プランではカバーされません)、手術を受け、術後の不便に対処し、家族、友人、教会からの反対にしばしば直面する社会的汚名に耐えなければなりません。

個人的な証言

この主の戒めに服従しようと決意した男性は、本当にそれを実行する強い意志が必要です。さもなければ、簡単に諦めてしまいます。この道を放棄するよう促す励ましは豊富にあります。私はこれを知っています。なぜなら、私自身が63歳の時にこの戒めに服従して割礼を受けたからです。

第二の理由：

神の委任または権限の誤解

第二の理由、そして確かに主要な理由は、教会が神の委任または権限について適切な理解を欠いていることです。この誤解は、イエスの昇天からわずか数十年後に教会指導者間の権力争いが始まり、悪魔によって

早い段階で利用されました。その結果、神がペテロとそのいわゆる後継者に、神の律法に望むままの変更を加える権限を委任したというばかげた結論に至りました。



イエスが父のもとに戻るとすぐに、悪魔は教会指導者に影響を与え、異邦人を神の永遠の戒めから遠ざけ始めました。

この異常は割礼をはるかに超えて広がり、旧約聖書の他の多くの戒めにも影響を与えました。それらはイエスとその従者が常に忠実に従っていたものです。

神の律法に対する権限

悪魔に靈感を受けた教会は、神の聖なる律法に対する権限の委任は、神自身から直接—旧約聖書の預言者またはメシアを通じて—来なければならないという事実を無視しました。

単なる人間が、神にとって貴重な律法を変更する権限を自らに与えるなど考えられません。主の預言者もイエスも、メシアの後に父が聖書内外のどのグループや個人にも、彼の最も小さな戒めさえも無効にし、廃止し、修正し、更新する力や靈感を与えると警告したことはありません。それどころか、主はこれが重大な罪であると明確に述べています：「私があなたに命じるものに付け加えたり、そこから引いたりせず、私があなたに与えるあなたの神、主の命令を守りなさい」(申命記4:2)。

神との関係における個性の喪失

意図しない仲介者としての教会

もう一つの重要な問題は、被造物と創造者との関係における個性の喪失です。教会の役割は決して神と人との仲介者となることではありませんでした。しかし、キリスト教時代初期に、それはこの役割を担いました。

聖霊に導かれた各信者が父と子と個別に関係を持つ代わりに、人々は主が許可するものや禁止するものを指導者に完全に依存するようになりました。

聖書へのアクセス制限

この深刻な問題は、主に16世紀の宗教改革まで、聖書へのアクセスが聖職者に限られた特権だったために起こりました。一般人が自分で聖書を読むことは明確に禁じられ、聖職者の解釈なしには理解できないという正当化のもとでした。

指導者が民に与える影響

指導者からの教えへの依存

5世紀が経過し、聖書への普遍的アクセスが可能になったにもかかわらず、人々は指導者が教えるもの—正しいか間違っているか—にのみ頼り続け、神が各個人に求めることを独立して学び行動することができません。

宗教改革前に存在した神の聖なる永遠の戒めについての同じ誤った教えが、すべての宗派の神学校を通じて今も伝えられています。

イエスによる律法についての教え

私の知る限り、将来の指導者にイエスが明確に教えたことを教えるキリスト教機関は一つもありません。それは、メシアの到来後も神のどの戒めもその有効性を失っていないということです：「まことにあなたがたに告げます。天と地が過ぎ去るまで、律法から一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが成就するまでは。ですから、これらの最も小さな命令の一つを脇に置き、そのように他人に教える者は、天の王国で最も小さな者と呼ばれますが、これらの命令を実践し教える者は、天の王国で偉大な者と呼ばれるでしょう」(マタイ 5:18-19)。

一部の宗派における部分的な服従

神の戒めの選択的遵守

いくつかの宗派は、主の戒めが永遠に有効であり、メシア以降の聖書の著者がこの真実に反するものを書いたことはないというように努めています。しかし、何か神秘的な理由で、彼らはキリスト教徒にとって依然として拘束力のある戒めのリストを制限しています。

これらの宗派は通常、十戒(安息日、第四の戒めの7日目を含む)とレビ記11の食事法を強調しますが、それ以上は進めません。

選択性の不整合

最も興味深いのは、これらの特定の選択が、なぜこれらの特定の戒めが依然として有効であるのか、そして髪と髭の保持、ツイットの着用、または割礼などの他のものが言及も擁護もされないのかを、旧約聖書や四つの福音書に基づいた明確な理由付けを伴っていないことです。

これにより疑問が生じます: 主のすべての戒めが聖であり正しいならば、なぜ一部だけに従い、すべてに従わないのでしょうか?

永遠の契約

契約のしるしとしての割礼

割礼は、神とその民との間の永遠の契約であり、他の人口から区別された聖なる人間のグループです。このグループは常にすべての人に開かれており、一部が想定するようにアブラハムの生物学的子孫に限定されたことはありません。

神がアブラハムをこのグループの最初として定めた瞬間から、主は割礼を契約の目に見える永遠のしるしとして制定しました。彼の自然な子孫と彼の血統ではない者双方が、神の民の一部となることを望むなら、この契約の物理的しるしが必要であると明確にされました。

神の永遠の律法に従わないための使徒パウロの著作の利用

マルキオンによる聖書正典への影響

キリストの昇天後に現れたさまざまな著作を編纂する最も初期の試みの一つは、2世紀の裕福な船主であるマルキオン(85年 - 160年)によって行われました。マルキオンはパウロの熱心な追随者でしたが、ユダヤ人を嫌っていました。

彼の聖書は主にパウロの著作と彼自身の福音書で構成されており、多くの人はこれをルカの福音書の盗作版と考えています。マルキオンは他のすべての福音書と書簡を拒否し、それらを靈感されていないものとして退けました。彼の聖書では、旧約聖書へのすべての言及が削除され、彼はイエス以前の神はパウロが宣べ伝えた神と同じではないと教えました。



15世紀の画家ジョヴァンニ・ベリーニによる絵画には、ラビによるイエスの割礼が描かれ、ヨセフとマリアが付き添っています。

マルキオンの聖書はローマ教会によって拒否され、彼は異端者として非難されましたが、パウロの著作のみが神に靈感されたものであり、旧約聖書全体とマタイ、マルコ、ヨハネの福音書を拒否するという彼の見解は、すでに多くの初期キリスト教徒の信仰に影響を与えていました。

カトリック教会の最初の公式正典

新約聖書正典の発展

最初の新約聖書正典は、イエスが父のもとに戻ってから約350年後の4世紀後半に公式に認められました。ローマ、[ヒッポ\(393年\)](#)、[カルタゴ\(397年\)](#)でのカトリック教会の会議は、今日知られている新約聖書の27冊を確定する上で極めて重要でした。

これらの会議は、キリスト教共同体で流通していた多様な解釈やテキストに対処するために正典を統合するのに役立ちました。

聖書形成におけるローマの司教の役割

パウロの手紙の承認と収録

パウロの手紙は、4世紀にローマによって承認された著作のコレクションに含まれました。カトリック教会によって神聖と見なされたこのコレクションは、ラテン語で *Biblia Sacra*、ギリシャ語で *Tà biblía tà ágia* (*ta biblia ta hagia*) と呼ばれました。

どの著作が公式正典を構成すべきかについての数世紀にわたる議論の後、教会の司教たちは、ユダヤ人の旧約聖書、四つの福音書、使徒行伝（ルカに帰せられる）、教会への書簡（パウロの手紙を含む）、およびヨハネによる黙示録を承認し、神聖なものとして宣言しました。

イエスの時代における旧約聖書の使用

イエスの時代には、イエス自身を含むすべてのユダヤ人が、教えにおいて旧約聖書のみを読み、参照していたことに注意することが重要です。この慣習は主に、キリストの約3世紀前に編纂されたギリシャ語版のテキスト、[セプトウアギンタ](#)に基づいていました。

パウロの著作解釈の挑戦

複雑さと誤解

パウロの著作は、イエス後の他の著者のものと同様に、何世紀も前に教会によって承認された公式聖書に組み込まれ、キリスト教信仰の基礎と見なされています。

しかし、問題はパウロ自身ではなく、彼の著作の解釈にあります。彼の手紙は複雑で難しい文体で書かれており、これは彼の時代にすでに認識されていた挑戦です（2ペテロ3:16に記載されているように）。その当時、文化的・歴史的背景が読者にまだ馴染み深かったにもかかわらずです。何世紀も後の全く異なる文脈でこれらのテキストを解釈することは、さらに難しさを増します。

権限と解釈の問題

パウロの権限の問題

中心的な問題は、パウロの著作の関連性ではなく、権限とその移譲の基本原則にあります。これまで説明したように、教会がパウロに帰する、神の聖なる永遠の戒めを取り消し、廃止し、修正し、更新する権限は、彼に先立つ聖書によって裏付けられていません。したがって、この権限は主から来るものではありません。

旧約聖書や福音書には、メシアの後に神がタルソス出身の者を遣わし、すべての人々が耳を傾け従うべきだという予言はありません。

旧約聖書と福音書との解釈の整合性

一貫性の必要性

これは、パウロの著作の理解や解釈が、彼に先立つ啓示と一致しない場合、それが誤っていることを意味します。したがって、神とその言葉を真に恐れるキリスト教徒は、主が旧約聖書の預言者やメシアであるイエスを通じて明らかにしたものと一致しない、パウロまたは他の著者による書簡の解釈を拒否しなければなりません。

聖書解釈における謙虚さ

キリスト教徒は知恵と謙虚さを持って次のように言うべきです：

「私はこの箇所を理解できず、私が読んだ説明は、主の預言者やイエスが語った言葉に裏付けられていないため偽りです。主の意志であれば、いつの日か彼が私に説明してくれるまで、これを脇に置きます。」

異邦人にとっての大きな試練

服従と信仰の試練

これは、主が異邦人に課すことを選んだ最も重要な試練の一つと見なされるかもしれません。それは、ユダヤ人がカナンへの旅で直面したものに類似した試練です。申命記8:2に述べられているように：「あなたの神、主がこれら40年間、荒野であなたを導いた道を思い出さない。それはあなたを謙虚にし、あなたの心の中にあるもの、つまり彼の戒めを守るかどうかを知るために試したのです。」

服従する異邦人の特定

この文脈において、主はどの異邦人が本当に彼の聖なる民に加わる意志があるのかを見極めようとしています。それは、教会からの強い圧力や、教会への手紙に含まれる数多くの箇所が、預言者や福音書で永遠とされているいくつかの戒めが異邦人に対して取り消されたかのように見えるにもかかわらず、割礼を含むすべての戒めに服従することを決意する者たちです。

肉と心の割礼

一つの割礼：肉体的かつ霊的

割礼には二つの種類があるのではなく、肉体的なものだけであることを明確にすることが重要です。「心の割礼」というフレーズが聖書全体で使われているのは、「傷ついた心」や「喜びに満ちた心」と同じく、純粹に比喩的であることは誰にとっても明らかであるべきです。

聖書が誰かが「心に割礼を受けていない」と述べる時、それは単にその人が神を真に愛し、彼に従う意志を持ってあるべきように生きていないことを意味します。

聖書からの例

言い換えれば、この男性は肉体的に割礼を受けているかもしれませんが、彼の生き方が神がその民に期待する生活と一致していません。預言者エレミヤを通じて、神はイスラエルのすべてが「心に割礼を受けていない」状態であると宣言しました：「すべての国々は割礼を受けていない、そしてイスラエルの全家は心に割礼を受けていない」(エレミヤ9:26)。

明らかに彼らはみな肉体的に割礼を受けていましたが、神から離れ、彼の聖なる律法を捨てることによって、心に割礼を受けていないと判断されました。

肉体と心の割礼が必要

神のすべての男性の子、ユダヤ人であれ異邦人であれ、肉体だけでなく心においても割礼を受けなければなりません。これは次の明確な言葉で明らかです：「主権者である主はこう言います：イスラエルの民の中に住む者を含むどの外国人も、身体と心の両方で割礼を受けていない限り、私の聖所に入ってはなりません」(エゼキエル44:9)。

主な結論

1. 心の割礼という概念は常に存在しており、新約聖書で真の肉体的割礼の代わりとして導入されたものではありません。
2. 割礼は、ユダヤ人であれ異邦人であれ、神の民の一部であるすべての人に要求されています。

割礼と水の洗礼

誤った代替

一部の人々は、水の洗礼がキリスト教徒のために割礼の代わりとして制定されたと誤って信じています。しかし、この主張は純粹に人間の発明であり、主の戒めに服従することを避けようとする試みです。

もしそのような主張が真実であれば、メシアの昇天後に神が彼の民に加わりたいと願う異邦人に対して割礼を要求せず、洗礼がその代わりになると示す預言者や福音書の箇所が見つかるかと予想されます。しかし、そのような箇所は存在しません。

水の洗礼の起源

さらに、水の洗礼がキリスト教以前から存在していたことに注意することが重要です。バプテスマのヨハネは洗礼の「発明者」でも「先駆者」でもありませんでした。

洗礼(ミクヴェ)のユダヤ的起源

浄化の儀式としてのミクヴェ

洗礼、またはミクヴェは、バプテスマのヨハネの時代よりずっと前からユダヤ人の間で確立された浸水の儀式でした。ミクヴェは罪と儀式上の不浄からの浄化を象徴していました。



ドイツのヴォルムス市にある、ユダヤ人による儀式の浄化に使われた古代のミクヴェ。

異邦人が割礼を受けたとき、彼らはまたミクヴェを受けました。この行為は儀式上の浄化だけでなく、彼らの古い異教の生活の死—水中に「埋葬」されること—を象徴し、水から出てくることは、子宮の羊水を思い起こさせ、ユダヤ人としての新しい生活への再生を象徴していました。

バプテスマのヨハネとミクヴェ

バプテスマのヨハネは新しい儀式を作り出していたのではなく、既存のものに新しい意味を与えていました。異邦人が古い生活に「死に」、ユダヤ人として「再生」するだけでなく、罪の中に生きるユダヤ人にも悔い改めの行為として「死に」、「再生」するよう呼びかけました。

しかし、この浸水は必ずしも一度きりの出来事ではありませんでした。ユダヤ人は儀式上不浄になったとき、例えば神殿に入る前に浸水しました。彼らはまた、一般的には今日でも、悔い改めの行為としてヨム・キプールに浸水します。

洗礼と割礼の区別

儀式の異なる役割

洗礼が割礼を置き換えたという考えは、聖書や歴史的なユダヤ人の慣習によって裏付けられていません。洗礼(ミクヴェ)は悔い改めと浄化の意味深い象徴であり続けますが、神の契約の永遠のしるしである割礼を置き換える意図はありませんでした。

両方の儀式はそれぞれ独自の目的と意義を持ち、互いを否定するものではありません。